

2-4-3. 第1回調査と第2回調査結果の比較

第1回調査と第2回調査結果の評点の比較を表2-4-3に示した。ただし第1回調査結果については、B地域は5つのコドラートの平均値とし、C地域では、C1地域をカシワ林のコドラート、C2地域をミカヅキグサ湿地のコドラートとした。

比較の結果、評点はB地域では8.9増加したが、C1地域とC2地域ではそれぞれ3.0ずつ減少した。

B地域では評点が増加し、順調に林分の遷移が進んでいるとされた植生調査の結果と一致する。C1地域では、植生調査の結果、大径木の枯死などにより土壤が乾燥化した可能性があり、それにより土壤動物相が影響を受けた可能性がある。C2地域については、第1回調査、第2回調査ともに評点が低かった。土壤動物を評点により評価する手法自体が、湿地に適する手法であるのかどうか疑問が残った。

ただしこれらの差は、2回の調査で調査地点が変わっている可能性があること、サンプル数がことなること、また調査時期が異なることなどによる影響が大きいと考えられ、環境の変化を反映しているかどうかについては不明である。

表2-4-3 土壤動物評点の比較（北海道）

調査地域	植生	第1回評点	第2回評点*
B地域	コナラ・ミズナラ林	32.4	41.3
C1地域	カシワ林	28.0	25.0
C2地域	ミカヅキグサ・スゲ群落	18.0	15.0

注1：第2回評点は3サンプルの平均値とした。

2-5. 鳥類調査

2-5-1. 調査方法及び解析方法

第1回調査及び第2回調査の調査内容の詳細を表2-5-1に示した。

第1回調査では、鳥類相の調査のほか、巣箱調査も行ったが、第2回調査では巣箱調査は行わなかったため、ここでは省略した。

鳥類相の調査では、冬季と繁殖期の2期に分けて調査を行った。第1回（1991年度）調査の冬季調査では重点モニタリング調査地域でラインセンサス調査を行い、その結果確認された種のリストを作成した。繁殖期調査および1992年度の冬季調査では、調査地域内の環境の違いなどを考慮して、調査地域を23区画に区分し、調査地域内を無作為に歩き回って観察を行い、調査区画ごとの確認種リストを作成した。

第2回調査では、繁殖期と非繁殖期の2回にわけて、3つの重点モニタリング調査地域を森林、湿原、開放水面の3つの環境に区分し、調査を実施した。第2回調査の鳥類調査区画分け図を図2-5-1に示した。

調査手法や調査回数等の差から、第1回調査と第2回調査の結果を比較するのは困難であるが、確認種のリストと、陸鳥の種ごとの食性とサイズ構成についての傾向の比較を試みた。比較ではまず、第2回調査の結果を記載し、その後、第1回調査結果と第2回調査結果の比較を行った。

表2-5-1 調査内容の詳細（北海道）

項目	第1回		第2回
重点モニタリング調査地域	A地域	B、C地域	A, B, C地域
冬季調査回数	11	12	2
繁殖期調査回数	8		5
調査日	1992.2.5～2.29、1992.10.21～1993.2.1(冬季) 1993.6.10～1993.7.27(繁殖期)		1997.3.11,25(冬季) 1997.5.2～7.4(繁殖期)
調査手法	1991年度調査では、重点モニタリング調査地域において、定点調査とラインセンサス調査により出現する鳥類を記録した。 1992年度調査では、調査地域を23区画に区分し、調査地域内を無作為に歩き回って観察を行い、確認した種と確認した区画の番号を調査票に記録した。		3つの重点モニタリング調査地域を、森林、湿原、開放水面の3つの環境に区分し、調査地域内を無作為に歩き回って種を確認した。

注1：第1回調査では巣箱調査も実施されたが、第2回調査では実施されなかつたため、ここでは省略した。

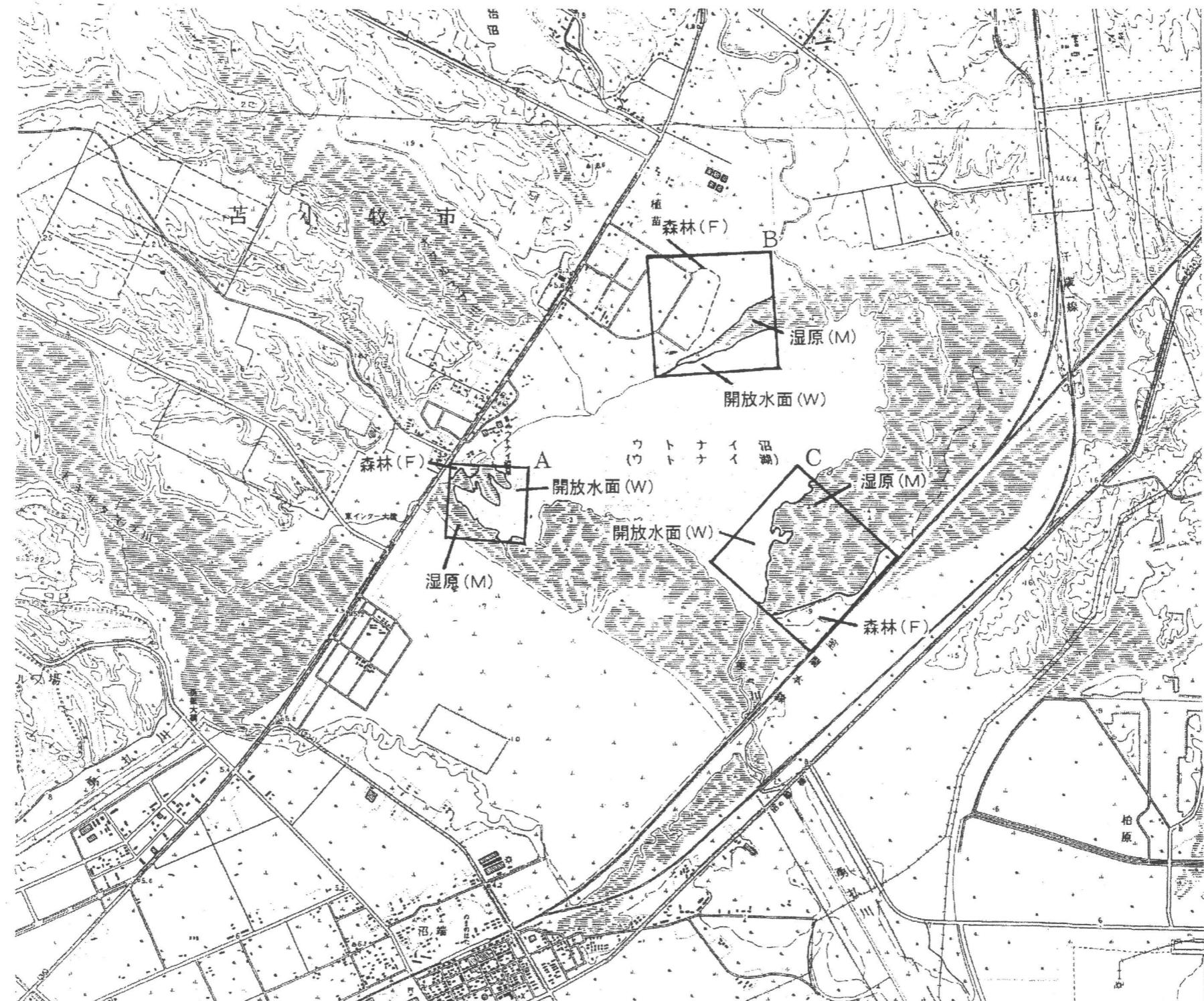


図 2-5-1 鳥類調査区画分け図

1:25,000 沼の端

昭和59年9月30日発行 (3色刷) 許可なく複製を禁ずる
著作権所有兼発行者 国土地理院